

[特別寄稿]

日本デザイン美学の源泉・「雪」

“Snow” A Source of Aesthetics about Japan Design

黒川 威人
KUROKAWA Taketo

1. はじめに

日本は世界的に見て雨の多い国である。また九州の南端に至るまで量の多寡はあれ雪が降る。それが風土の根幹をなし、日本人の精神構造に大きな影響を与えてきた事はよく知られるところである。和辻哲郎はその著『風土』の中で「人間はかつて周囲の自然から引き離された白紙の状態にいたことはない」と述べ「だから自然の特殊性はその自然においてある人間の精神的構造に属する問題であると見られなくてはならぬ」とするが、本稿は同じ視点から、私が比較的最近書いた日本の気候風土とデザイン美学の関係についての何編¹かをもとに再構成したものである。具体的には、和歌など日本の短詩形文学に表れる「雪」を手掛かりに、日本のデザイン美学の源泉を探ろうとしたものである。

2. 雪月花—日本美の源流としての雪

日本では「雪月花」が美しいものの典型として古くから好まれてきた。その起源をひもとくと「雪月花は、白居易の詩『寄殷協律』の一句『雪月花時最憶君（雪月花の時 最も君を憶ふ）』による語。雪・月・花という自然の美しい景物を指す語である²」とある。古代から中国文化を盛んに取り入れていた日本では、この白居易による詩は人気があったらしく、和漢朗詠集にも収載されている。しかし実は、雪月花を詠み込んだ歌は日本には遥か以前からあった。その最も早い事例が万葉集巻十八に見られる。即ち「宴席詠雪月梅花歌一首」と題した次の歌である。

雪の上に 照れる月夜に 梅の花
折りて贈らむ 愛しき子もがも 大伴家持

この家持の歌は天平勝宝元年(749)即ち、越中の守として在任中の32歳の作と見られるのに対し、白居易の詩は宝暦元年(825)54歳頃、長安にあって遥か江南にいるかつての同僚、殷協律を思って読んだものなのである³。この事実から見る限り白居易よりかなり以前から日本人は雪月花を好んでいたということになる。ただし、梅は中国からもたらされたものであり、当時、気鋭の歌人でもあった家持は大陸(中国)で、どのような詩が好まれているかを知った上でこの歌を詠んでいる可能性がある。家持の歌の特徴については別項で仔細に検討することとしたい。ところで、二人の歌を比較してみると、「雪月花」の両者の使われ方には少しく違いがあるように思われる。

日本の家持の場合は、雪の上を照らす月光の下、梅の花を折るという具体的な光景を描いているのに対し、中国の白居易の場合は、雪月花が美しい季節になると、遥かな君を思い出すというもので、それらが美しい季節のことを全体的に指していると考えられることである。そうした視点で和漢朗詠集や万葉集などの古代歌集を見てみると、この歌に限らず、日本の場合は季節ごとの美しいものをより具体的に見ているように思われる。即ち、花なら梅のほか桜、藤、萩など種類が多い事。月の場合は後述する明恵の歌のように近しい存在として見ていること。そして雪に関しては、はだれ雪など日本特有の雪模様を指すことが多いことである。これに対し、中国の場

合は、それらが美しい季節の景物を詠むのに、名物や名所とされる対象が多く、三千里や一万株などスケールの大きな表現を好んで用いることである。次の和漢2首を比較するとそれが良くわかる⁴。

銀河沙^{いざなみ}漲る三千里 梅嶺^{ひら}花排く一万株 白

白居易によるもので、梅嶺とは大庾嶺のことであり梅の名所とされる。

[訳] 雪の降り積もった様子は、あるいは天の川の砂が降ってきて三千里の彼方まであふれ満ちているようであり、あるいはまた大庾嶺に一万株の梅が一時に咲き乱れたようだ。

雪降れば 木ごとに花ぞ 咲きにける
いづれを梅と わきて折らまし 友則

紀友則によるもので、「わきて」は「見分けて」の意であって、梅に沫雪がかかって、折り取ろうにもどれが梅と見分けがつかない、という意である。雪は沫雪でありふわふわとして花びらを覆っているのであろうと想像される。なお「木ごと」は梅の字を分解したものであり言葉の遊びだが、漢詩の離合詩の影響かもしれない。

こうした違いは、無論、彼我の国土の広さが関係しているであろうことは明らかだが、それはまた気候風土の異なりとも密接につながっている。

実は、中国の雪と日本の雪は気象学的、雪氷学的に大きく異なっている。具体的には項をあらためて述べることにするが、日本で特に雪が愛好された理由の一端はこの気象に帰することが可能に思われる。日本の気象が、日本特有の雪を降らせ、日本人の雪に対する美的な感性を世界に比類のないものに育て上げていったのではあるまいか。

平安時代の女流エッセイストとして名高い清少納言による「枕草子」の冒頭には、あの「春はあけぼの……」ではじまる、季節毎の興趣を覚える事柄を綴った記述があり、夏の夜には月への言及がみられるものの、花に対する言及はどの季節にも見られない。ところが、冬の場面では「冬はつとめて、雪の降り

たるはいうべきにもあらず（冬は早朝、雪が降っていればいうまでもなく素晴らしい）」と、雪をたたえているのである。このように、この文章でも先の和歌でも日本人は雪を美しく優雅なものとしか思っていないのである。

私が「雪」を「日本美の源泉」とまで考える根拠は、花を愛でる民族・文化は世界中で見られること、また月に関しても世界中の詩や物語中で美しく、神秘的なものとして扱われることが多いことと比べ、それらにも増して、日本人は「雪」に対して美を感じてきたと考えられる事例が文芸に限らず、美術や工芸の作品中にも多く見られることに由来している。以下、日本の短詩形文学を中心に見て行きたい。

3. 美しい日本の私

この小見出しは『雪国』で著名な川端康成が1968年日本人として初めてノーベル文学賞を受賞した際、その受賞式にともなって行った講演のタイトルである。川端は日本の「雪月花」を切り口に語り始めるが、以下、川端による日本美への視点を講演録⁵から振り返ってみたい。

川端は先ず道元禪師と明恵上人による二首の歌を披瀝する。

春は花 夏ほととぎす 秋は月
冬雪さえて 涼しかりけり 道元
雲を出でて 我にともなふ 冬の月
風や身にしむ 雪や冷めたき 明恵

このうち明恵の歌については、この歌に添えられた長い詞書きを紹介し、これを川端自身がしばしば揮毫するのは「まことに心やさしい、思ひやりの歌ともとれるから」と述べている。すなわち「雲に入ったり雲を出たりして、禪堂に行き帰りする私の足もとを明るくしてくれ、狼の吠え声もこはいと感じさせないでくれる『冬の月』よ、風が身にしみないか、雪が冷たくないか」と思いやる、「しみじみとやさしい日本人の心の歌」であるからと説明する。もう一つの道元の歌については「古来の日本人が春夏秋冬

に、第一に愛でる自然の景物の代表を、ただ四つ無造作に並べただけの、(中略)歌になっていない歌と言へば言へます」としつつ、別の歌、良寛の辞世の歌を上げる。

形見とて 何か残さん 春は花
やまほととぎす 秋はもみじ葉

そして「これも道元の歌と同じように、ありきたりの事柄とありふれた言葉を、ためらひもなく、といふよりも、ことさら求めて、重ねて重ねるうちに、日本の神髓を伝へたのであります」と述べている。

筆者は当初、この最初の二首にはどちらも「雪」が含まれていて、しかもその思いは「美」と「冷たさ(厳しさ)」という二つの事柄を対峙させることで人の情を際立たせていると、浅く読み解いていたが、これは講演の最期に至って見事に裏切られる。それは、締めくくりに川端が「無」の美学をとりあげ、これらの歌は四季の美を歌いながら「禪」に通じるものと説いているからである。さらに、日本の茶道を引き合いに「茶道が尊ぶ『わび・さび』は、勿論むしろ心の豊かさを蔵してのことですし、きわめて狭小、簡素の茶室は、かへって無辺の広さと無限の優麗とをやどしてをります」と述べ、花についても「小さい椿、その白をえらび、ただ一つのつぼみを生けます。色のない白は最も清らかであるとともに、最も多くの色を持っています」と日本美の伝統の本質を、「白」「無」であるとし、それは何もないことではなく無限の豊かさを蔵しているのだとしている。日本人にとってさえ難解なこの結論は、西欧人にとっては到底理解しがたい論理であったかもしれない。当時、この講演が好評であったという報道はなされなかった。

筆者は川端の没年齢を大分超えた最近になってその意味が多少分かってきたように思うので披瀝しておきたい。「無」というのは、受け手に取っていかようにも解釈できるということであり、四季の自然の美しい日本ではことさらに特定の事柄を読み込まずとも、いや読み込まないことによって、逆に、それぞれが体験した、あるいは内面に持っている美しい

世界へと思いを致すことが出来るという意味ではないのかと思うのだ。禪とは「主観と客観が分かれる前の、自己と他者とに対立する以前の存在そのものへ立ち還る⁶⁾」ことであるとするなら、まさしくこれは禪に通じる世界なのである。人の目を奪うような豪華あるいは広い茶室でなく、極限まで狭小で質素であることこそが「無限の豊かさを蔵している」とするゆえんであろう。また、色を否定して白こそが無限の豊かさを蔵しているとするのは雪景色が意識下にあることは疑いなく、それはやがて百花撩乱の春を迎え、豊穰の秋へと連なるという民俗共通の美意識をも意識下に置いてのことであろう。

こうした論が直接現代のデザインとどうつながるのかと問われると難しいが、あえて、シンプルであることは無限の豊かさに通じると解すれば、日本のモダンデザインにとって一つの啓示となるかもしれない。

4. 家持の歌に見る雪への畏敬と先進性と

ここで若干視点を変えて、時代を再度万葉の頃までさかのぼり、家持の歌を通して雪景色が古代人に与えていたと考えられるもう一つの側面を見てみたい。

白山信仰が全国にまたがって行われていることが示すように、世界中を見ても白い雪を頂く山はそれ自体が里人に豊穰をもたらす神とされることが多くある。日本の場合ははるかな山巔のみならず里に於ても同じく雪が降るのである。このため都の人々にも、雪が降ることは豊作を意味する縁起の良いこととされていた。大伴家持は越中国司として在任中、身近に深々とした雪が降る様を目の当たりにし、新鮮なまなざしで多くの歌を詠んだのであろうと思われる⁷⁾。また冬季以外でも富山平野からは雪をまとった立山を仰ぎ見ることが出来ることから、立山に関する歌を数多く詠んでいるが、そこには神の山としてあがめる様子が読みとれる。「立山の賦一首と短歌、この立山は新川郡にあり」と前置きして長歌と短歌二首が載せられている。ここでは短歌一首のみ紹介する。

立山に 降り置ける雪を 常夏に
見れども飽かず 神からならし

「神からならし」は「神の山だからに違いない」という意であるが、遠い都では見る事のなかった神の山は、美しく見飽きなかったであろうことは想像に難くない。家持は以下で述べるように歌人として数々の先進的な歌詠みを行っているのだが、その根底にはこうした自然信仰からくる「雪」即ち「白」に対する心証があったことを確認しておきたい。

そうした雪に対する神聖な思いとは別に、家持は、雪をそれまではあまり経験したことがない「美しいもの」、「風雅なもの」として新鮮な目で観察し歌に詠み込んでいる。「越中秀吟」と呼ばれ、越中時代の家持の代表作とされる十二首の連作中に次の歌がある。

わが園の 李の花か 庭に降る
はだれのいまだ 残りたるかも

この歌は、わが庭の李の花だろうか、それとも庭に降った沫雪が未だ枝に残っているのだろうか、との意であるが、「はだれ」とは春の沫雪、または消え残ったまだら雪をさし、季語としては「春」である。これは日本特有の温暖な気候の中でのみ見られる雪であって、家持はこれを見事に詠み込んでいる。

では、同じ夕べに詠まれた次の歌はどうか。

春の苑 紅にほふ 桃の花
下照る道に 出で立つ娘子

新谷秀夫によれば家持の歌の特徴のひとつとして、中国の漢詩の世界を日本の和歌で表現しようとしたことが指摘されるが、この歌がまさにその例である。「題詩には『桃李』と見えるが、桃李は漢詩の代表的な素材の一つである。さらに万葉人たちが読んでいた中国の書籍には、桃李と美女を組み合わせた漢詩も数多く見られる⁸」ということであり、絵画で言えば、西はトルファンに至る大陸で盛行していた「樹下美人図」テーマの大陸のスケールを取り込んでいるともいえ、ここでも家持の先進性が浮かび上がってくる。なお先に示した「雪の上に照れる

月夜に……」の歌に読まれた「梅の花」もまた中国の影響であったと思われる。それは西山松之助が、万葉集歌に梅の花が多いのは「当時長安の都から遣唐使たちが持ち帰り、それが日本人にも喜ばれた最もモダンで進歩的な花であったからかもしれない⁹」と述べていることでも裏付けられる。私はもうひとつデザイン的な面での先進例を示しておきたい。

この雪の 消残るときに いざゆかな
山橋の 実の照るも見む

ここで、山橋とはやぶこうじのことであり、その赤い実が雪に照り映えている姿を見に行こう、この雪が消えてしまわないうちに、という意である。さすが植物や雪をよく見ている。真っ白な雪の中に真っ赤な丸いやぶこうじの実という取り合わせは非常にイメージアビリティの高い歌であり、色彩デザイン的に見ても美しく斬新である。

古今集には、この歌に触発されたと思われる次の歌が収載されている。

深山には 霰^{あられ}降るらし 外山^{とやま}なる
まさきの 葛^{かずら} 色づきにけり (神遊びのうた)

あられの白と紅葉の色の対比が目には浮かぶようである。しかしこの歌の場合は直接に雪を目にしている家持と違い、あられは想像しているだけなのでインパクトは弱い。なおこの二首に限らず雪が白であることに関して言えることは、雪が不要のものを消し去り、主題を浮かび上がらせる効果があるということである。これは障屏画で言えば、背景を金箔や銀箔で埋め尽くしシンプルな平面構成で主題を浮かび上がらせる琳派の手法につながっていると私は考えている。

なお「外山」とは人里に近い山のことであるが、日本は山国であり都といえどもすぐそばに里山があり、そこには一年を通して清らかな水が流れているという背景も見逃せない。

ちなみに家持は川を馬で渡る時、雪解け水で増水していたため鐘が濡れたことを驚き次のように詠んでいる。

立山の 雪し来らしも ^{はいつき}延槻の
河の渡り瀬 ^{あぶみつか}銚侵すも (万葉集 卷十七)

延槻の河とは早月川(魚津市と滑川市の境界の川)のことである。川や山はこのように雪と並んで日本の文学他の諸芸術に欠かせない大きな存在であることは、万葉の時代から今日に至るまで変わらないのだが、その光景を直接体感した家持は一気にその歌の才能を開花させることになったのであろう。

5. 気象学より見る日本の雪と中国の雪

ここで日本の雪について科学的な説明を行っておきたい。多くの芸術作品や文学作品に表現されてきた雪とはどのようにして生成されたものなのであろうか。和辻哲郎が「風土」で指摘して以来、日本がモンスーン気候に属することはよく知られているが、これは学術的には次のように説明されることが多い、即ち「季節風気候 (monsoon climate) 季節風が卓越する地域に特有な気候で、モンスーン気候ともいう。季節風は冬と夏では卓越風向がほぼ正反対になり、対照的な気候を生じさせる。一般に大陸から乾燥した低温な大陸気団が来襲する冬が乾季、海洋から高温多湿な海洋気候が来襲する夏が雨期となる。季節風気候地域は緯度とほぼ平行に帯状に分布している (以下略)¹⁰」ここには雪の多い北陸のことが述べられていないが別の辞書では次のように補足する。「(前略) しかし本州の日本海側や、ベトナムなどのように冬に多量の降水、雪などが見られる所もある (以下略)¹¹」つまり本州の日本海側はモンスーン気候帯の中では特異な場所だということだ。別にケッペンという学者による気候区分では日本列島の大半が温暖 (温帯) 湿潤気候¹²という地域に含まれ、(ただし内陸部にあつては亜寒帯湿潤気候に属する地域も少なくなく、北陸近辺では富山県の立山や岐阜県の高山市、長野県の白馬村他3市3町2村が亜寒帯湿潤気候となる) 温帯にある国々の中では格段に雨の多いことが説明されるが、事実日本の平均年間雨量はおよそ1,800mmで、これは世界平均の

約2倍である。

この雨はやがて川となって海へと注ぐが、ケッペンの気象図で亜寒帯湿潤気候の地域以外では冬季といえども川は凍結することがない。また降り積もった雪は時間をかけて雪解け水となり年間を通しての水源となって豊かな自然や農作物を育ててきたのだが、一方山が海近くまで迫り急流の多いことでは、源流から海岸に至るまで景勝地が多く形成され、このことが庭園のデザインをはじめとする諸芸術に大きな役割を果たしてきたのである。

さて、ではこうした気候の日本ではどのような雪が降るのであろうか。「雪は天から送られた手紙である」の言葉で知られる中谷宇吉郎は、その著『雪¹³』のなかで、どのようなメカニズムで雪が降るのかを次のように説明している。「雪は空の高い処で出来てそれが漸次成長しながら地上に降りてくるものである。この時上空高く存在している水が凍るのであるが、この空中の水というのは水蒸気のことである」と説明している。すなわち、空気中に水蒸気が無い所では雪は発生しないということになる。ではこの水蒸気がどこから供給されるのかと言えば、日本海であり対馬暖流 (対馬海峡から日本海に流入する暖水で大部分は津軽海峡から太平洋へ、一部は宗谷海峡からオホーツク海に流れ出る海流) が大きく関係している。アメリカの五大湖では同様の現象で湖の東南岸には大雪が降ることが知られている。但し気温は日本海沿岸に比べ格段に低いので日本の雪とは趣をことにする。次頁の表は世界の主立った都市の年間雨量と1月の平均気温である。日本が同じく温帯に位置する諸外国の都市に比べいかに温暖な気象であるか、また多雨であるかが分かる。

なお、水蒸気が多いということは霞や雲の発生が多いということであり、これは「わび茶」の元祖と目される村田珠光の「月も雲間のなきは嫌にて候 (禅鳳雑談)」の名言を生み、絵巻物や障屏画において「すやり霞」や「金雲」といった日本独特の表現を生んだ要因の一つであると考えられるのである。

このような前提のもと、白居易の詩が生まれた中国と家持の歌が詠まれた日本の気候を比較してみよ

表：世界の都市の年間降水量および1月の平均気温

都市名	ロンドン※	北京	ワシントン	シカゴ
年間降水量	640.3	534.3	1014.0	927.5
1月の気温	5.8	-3.1	2.3	-4.6
都市名	金沢	京都	東京	西安***
年間降水量	2398.9	1491.3	1528.8	565.2
1月の気温	3.8	4.6	6.1	0.3

※理科年表平成25年版による。ロンドンはヒースロー空港。
統計期間 ※=1997-2010、***=1981-2005、無印は1981-2010

う。中国は広くいえば温帯モンスーン気候帯に属するが、内陸深く入った所では温帯大陸性気候であって雨量は年間600mm前後と日本に比べ3分の1である。また、特に冬季の雨量が極端に少ない。白居易の「雪月花」の詩が詠まれたのは長安つまり現在の西安であるから典型的な大陸性気候であり、その主な特徴は「降水量が少なく夏と冬の気温差(年較差)、昼と夜の気温差(日較差)が大きいこと。大陸性気団(日本付近ではシベリア気団、揚子江気団)の影響を受ける地域に存在する¹⁴」が上げられる。参考までに調べてみると1月の雨量はわずか6.7mmにすぎない。ちなみに2月は8.6mm、3月にようやく二桁の27.0mmとなり以後徐々に増えて行くが、ピークの7月にして100.0mmにすぎない(理科年表第86冊による)。

一方、平年気温は1月で0.3度であり、金沢の3.8、京都の4.6、東京の6.1度に比べ相当に寒い。これが意味するところは、西安では雪が非常に少なく、降っても地面が深々と埋もれるということは考えられず、水には氷が張り、雪は樹木に霧氷のようにへばりついている程度と思われることである。

しかし当時、あらゆる文物を中国から取り入れていた日本では文学にもその影響が大きく出ており、先に紹介した和漢朗詠集には冬の風物を詠み込んだ次のような漢詩が見られる。

氷田地に消えて^{るすい}蘆水短し
春枝条に入^{りゅうがんだ}って柳眼低れり 元

[訳] 田の面に残っていた氷はいつの間にか消えて葦が短い芽を出し、岸の柳の枝には春が

来て新芽が垂れ下がっている。

この詩は「早春」の項にあるものだが、日本ならば「雪消えて」となるべきところが「氷」であるのはいかにも大陸性気候である。同じ項には日本でなじみの深い次の歌がある。

石そそぐ 垂水のうへの さわらびの
萌えいづる春に なりにけるかな 志貴皇子

この本歌は、言わずと知れた万葉集に歌われた同じ作者の次の歌である。

石走る 垂水の上の さわらびの
萌えいづる春に なりにけるかも

注目すべきはアンダーラインを付した「垂水(たるひ=つらら)」と「垂水(たるみ)」であり、岩にそそぐ水が氷に変わっていることである。蕨が生える季節には日本では見られないはずの「つらら」を採用しているのは、中国詩の影響とともに、本歌取り¹⁵の流行した時代を映しているのであろう。こうした事例は日本人が詠んだ漢詩には随所に見られるのである。これに対し、日本の雪を読んだ歌は例えば次のようにリアリティの感じられるものが多い。

み吉野の 山の白雪 つもるらし
ふるさと寒く なりまさるなり 是則

この歌は古今集の次の歌によると思われる。「なりまさる」とは「強まった」という意味である。

夕されば 衣手寒し み吉野の
吉野の山に み雪降るらし(読み人知らず)

しらしらし 白けたる年 月かげに
雪かき分けて 梅の花おる 公任

[訳] 余りに白すぎてかえって興ざめである。髪も白く年老いた人が、白い月の光を頼りに白く積もった雪をかき分けて、白梅の枝を折るのは。

「雪かき分けて」の表現は、いかにもフワフワとした日本の雪を思わせる。

なお、万葉集には日本の雪を素直に読み込んだものが多く見られるので典型的な例を紹介しておきたい。

沫雪の ほどろほどろに 降りしけば
奈良の都し 思ほゆるかも 大伴旅人

これは家持の父旅人によるものである。題詩に「太宰帥大友卿、冬の日に雪を見て、京を憶ふ歌一首」とあるように九州の太宰府で読まれたものだ。初句の「沫雪の ほどろほどろに」が見事に日本の雪の特徴を表現している。先にも述べたように「沫雪」は暖国である日本にのみ許された冬景色なのである。

なお、ふわふわとした沫雪の大きなものは「牡丹雪」あるいは「綿雪」と呼ばれ、上空より地表に至る間に雪の結晶が数十から数百個が付着し合って出来るものであるとし、大きなものでは15センチにもおよぶことを中谷は前掲書で説明している。デザインの面では、江戸の染め物に「雪輪文様」として単体や「雪輪青海」のような連続紋様として盛んに使用されている。

6. 「北越雪譜」に見る雪の負の側面

天保年間に鈴木牧之という越後の国の人々が著した『北越雪譜¹⁶』は、中谷宇吉郎の前掲書にも冒頭で取り上げられているが、雪に関する様々な考察や雪国の生活と伝承を記したものであり、雪の少ない地域の人達から見れば驚くような雪の実態が書かれている。

この書の中で著者は「雪一尺以下ならば山川村里立地に銀世界をなし、雪の飄々翻々たるを観て花に論へ玉に比べ、勝望美景を愛し、酒食音律の楽を添え、画に写し詞につらねて、称翫するは和漢古今の通例なれども、これ雪の浅き国の楽しみなり。我が越後のごとく年毎に幾丈の雪を視ば何の楽き事かあらん。雪のために力を尽し財を費やし千辛万苦する事、下に説く所を視ておもいはかるべし」とのべ、暖国の人達には分からないであろう大雪にまつわる様々な事柄を知らしめようとの意図が示されている。中には雪崩によって家が壊され人や熊が死亡した話や、雪中の洪水、狼に襲われた一家の話など、

現地でなければ知る事が出来ない悲惨な話も多いが、雪中歩行の用具や橇(そり)などの道具類、さらには機織りや縮の雪晒し、市のことなど多岐にわたって書かれており、さながら雪国の冬の百科事典のようなものである。雪国においては、雪は「美」にとどまらず、時には死とも関わるものであって、日本の風土の最も過酷な一面を示すものとして貴重である。

著者は略伝によれば、本業は親の代より質屋であり、縮の仲買もしていたようだが、江戸の馬琴や蜀山人、京伝などの一流文士の他、谷文晁や北斎等の画家とも懇意であったといい、本人も画は幼少より狩野派に師事し、ほとんど絵師に近い腕前であって、本書の挿絵原画も多くは本人によるものである。他にも経書を学び詩作を行うなど相当の文化人であったようだが、当時、厳冬期に越後へ行き来することは至難の業であり、雪国の本当の姿を江戸の人々に知らしめたいとの思いが強かったのであろう。現代といえども雪害は絶えることはなく、雪国にとって雪は負の側面といえるが、一方で、現代では融雪装置の濫用が雪景の興趣を著しく削いでしまっている例があることも忘れてはなるまい。

なお、「上の巻」には「沫雪」という小見出しをもうけ、この言葉が古来詩歌に詠まれているのは暖国のものであるとし、雪国では、冬の雪はいくら積もっても固まる事がない沫雪だが、初春になると凍って、雪道は石を敷いたようになり「往来冬よりは易し」と書いているのが面白い。余談になるが、加賀藩が夏に将軍家へ献上しているのは氷ではなく氷室小屋に貯蔵しておいた雪であるとの紹介もしている。

7. 日本の美を特徴づける「見立」 「本歌取り」「レス・イズ・モア」

和田京子によれば「日本の美術の特質性は、伝統と現在、外来文化と土着文化の『とりあわせの美学』であり、そして異質なものを結び合わせる〈見立て〉の思考方法であり、日本の風土がもたらした繊細な感受性である¹⁷」とする。なかでも「見立て」は「日

本の美術を代表する表現手法である」とみる。「見立て」はまた和歌に見られる「本歌取り」に通じる手法である。「鎌倉時代には、和歌や連歌で、古歌や先人の詩の句、主題、発想、趣向を取り入れて作歌する『本歌取り』という修辞法で、すでに体系化されていた（前掲書）」ものだ。「本歌取り」に先鞭を付けた歌人とされる西行の歌を見てみよう。

散りそむる 花の初雪 ふりぬれば
踏みわけまうき 滋賀の山越え

「踏みわけまうき」は、踏み分けて行くのがつらいという意。「滋賀の山越え」は近江古京の滋賀の里へ通じていた古道を言うようだが、この歌に至るまでには下記のような多くの先行歌が念頭に置かれている（前掲書）。他にもあるが三首のみ掲出。

春霞 滋賀の山越え せし人に
あふ心地する 花ざくらかな 能因

桜花 みちみえぬまで ちりにけり
いかがはすべき 滋賀の山越え 橘成元

散りしける 花を踏まじと 避くほどに
ゆきぞやられぬ 滋賀の山越え 平忠盛

西行の歌を仔細に見てみよう、「花の初雪」というのは、花が散り敷いた様を雪に見立てている。それも初雪にである。西行は吉野山など人里離れた山中に庵を結ぶことが多かったので、雪の難儀な事はよく知っていたはずである。しかしここでは、花が散り敷いた様を初雪のようだと感嘆し心から喜んでいいる。その美しい初雪を踏み分けて行くのがつらいという言葉は、花とともに雪をも深く愛していたであろう西行の心を物語っている。先人たちが詠んだ歌の心を大切にしながら、独自の一首に仕立て上げている所がさすがであり、本歌取りの先駆者とされるに応わしい。

日本の美はこのように、先人の知恵に自らの感性を重ね合わせ、相互のおもいを一つに紡ぎ出して行くという微妙な変化の繰り返しとして進化してきたのであり、先人が成し遂げた成果を根底から覆した

り、破壊したりという事はしないで、その心を受け継ぎながら新しい美を作り上げるという伝統がある。熊倉功夫は次のようにこれを説明している。

「西欧的な芸術観より見ると、独創的な新しいスタイルの創造こそ独創であって型の継承とか、そこにわずかなヴァリエーションを付け加えることは芸術と認められないであろう。しかし、それはあまりに片寄ったものの見方である。型とは個人の生命や技術の限界を超えて、数世代にわたり、あるいは名人や名もなき多くの人々のすぐれた研鑽が積み重なって生まれた美の範疇である。その型を標準とし、緩やかに、微妙な変化の中に新しい創造性を発見するのが日本の美であった¹⁸⁾。これはまた日本の「民芸」に通じる考え方である。晩年、父宗悦が創立した日本民芸館の館長を兼任していた柳宗理は世界的に知られたデザイナーであったが、その柳の仕事についてブルーノ・ムナーリは次のように述べている。「(西欧の個人主義とは) 反対に、日本人の考え方は、共同体という感覚がある。人間は共同体から奪うのではなく、共同体に与えるために価値を見出すという考え方である。だから日本では、デザインの考え方がとても大きく存在する。日本の製品は(中略)、一人一人が何かを加えていくという、共同体によるデザインの産物であるといえるかもしれない¹⁹⁾。当時は未だ、日本製品はものまねだとする考え方が西欧には根強くあったが、さすがに世界的に知られた美術家・デザイナーであったムナーリは柳デザインを通して日本の美の特質を鋭く見抜いている。

英国人の日本美術史研究者タイモン・スクリーチは「日本美術と西洋美術の根本的な違いを、『見る』行為の違いである」とし、「西欧では『見る』ことが目に見えているものだけに集中して、科学的かつ客観的に対称を分析する行為であるのに対し、日本人にとって『見る』ことは、目に見えるものから目には見えない他のイメージを連想して行く行為である²⁰⁾」とするが、これまた見立てや本歌取りに通じる見方であるとともに、先に紹介した川端の禪にも通じるように思われる。

目に見えるものを通じて目には見えない深い精神世界を表現した典型的な一首を紹介しよう。

枯るるより 刈もはらわぬ 道見えて
雪に跡ある のべの草むら 後水尾院

後水尾院は後陽成天皇の三宮であり、桂離宮をつくった智仁親王は叔父に当たるが、2,000首におよぶ和歌を残した稀代の歌人であった。雪を詠んだ歌も少なくないが、この歌のように多くは自らの侘びた心の遍歴を示すかのように「道」を読んでいる。ここでは雪原に刈り払ってない枯れ草が見え、そこに道らしい跡がみえるという意味であって、見えているものはほとんど意味をなさないのである。科学技術重視の近代化の過程で日本人が忘れ去った感性なのかもしれない。

最期に、最もモダンデザインの真髄に迫るものとしてレス・イズ・モアについて触れておきたい。世界の建築家4大巨匠の一人とされるミース・ファン・デル・ローエの言葉として知られるが、知日家のドナルド・キーンは次のように見る「日本文化は西洋に深い影響を与えてきました。建築家たちがよく口にする（建築以外のほとんど全ての分野でもそうですが）『レス・イズ・モア（簡素に美あり）』という言葉には西洋の伝統ではなく、日本的な好みが見られています。とりわけ、簡素さを好む思想は日本文化の基礎であり、外国では比較のまれなものです²¹」と。これはこれまでの論を全て総括したものといって良いのではないかという気がする。もしかするとミースは日本の建築の本歌取りをしていたのかもしれないのである。ちなみにミースのトゥーゲント・ハット邸やファンズワース邸は日本の寝殿造りのように一室空間だし、バルセロナ・パヴィリオン屋根は雨の多い日本建築の深い庇を思わせ、明らかに両者には共通点が見て取れるのだ。

レス・イズ・モアはモダンデザインにとって非常に重要な概念であるが、近代日本がほとんど混乱なしにモダンデザインのトップランナーたりえたのは、ミニマム化や抽象化を進めてきたこうした歴史が背景にあったからとも考えられるのである。

8. おわりに

万葉集の長歌に添えられる反歌に始まった日本の短詩形文学は、古今和歌集では短歌が主流となり、新古今和歌集で頂点を迎える。やがて大衆文化が開く江戸となり、それまで貴族の遊びであった連歌を模した俳諧が世を風靡する。そして、明治に至って正岡子規による革新運動を経て、日本人が到達した世界で最も短い芸術詩としての「俳句」が完成したのである。これは一貫したミニマム化の流れであるが、これにともなって、短い文中に、より効果を生むための様々な技巧が生まれていったわけである。これは建築や庭園や絵画・工芸などの日本の美術全体の変遷とも連動しているのであって、ここで培われた美学は汲み尽くされることなく、今日なお、日本の文化の中に連綿と生き続けているといえる。その源泉の一つは明らかに日本の気候風土、なかでも気象学的にも独特な日本の雪であり、それが長い年月の間に日本人の感性の中にしみ込み、育くんだ美学であるということであろう。私の環境デザインの恩師である稲次敏郎東京芸大名誉教授（故人）はその著²²の中で『『作庭記』の見せ方』4種のうちのの一つとして雪景色の写真を示し、「抽象表現への過程」とのキャプションを付しておられるが、あらためてそれが得心されるのである。

最期に、茶の世界で引き合いに出されることの多い短歌二首と、日本文芸ミニマム化の頂点である俳句一首を持って締めくくりとしたい。

みわたせば 花も紅葉も なかりけり
浦の苫屋の 秋の夕暮れ
藤原定家（新古今和歌集）

この歌は千利休の師である武野紹鷗が茶の湯の境地として示したものであるとされるが、さかのぼれば村田珠光の「冷え枯れる」に行き着く。川端康成が日本美の本質を「無」だとした境地に近いが、花はなく紅葉も全て落ちつくした晩秋の、浜辺の夕暮れという静謐さを茶の湯の理想としたのであろう。

これに対し「わび茶」の完成者とされる利休が示

したのは次の歌であった。

花をのみ まつらむ人に 山里の
雪間の草の はるを見せばや
藤原家隆 (壬二集)

ここには雪の中とはいえ生命が息づいている。華やかではないが、遠からずやって来る万緑が萌え立つ春を予感させ、心が温くなる歌である。シンプルでいて生命感があり、人生を楽しくしてくれそうな予感がする、私の好きな歌である。

はだれ
斑雪照り 山家一戸に 来るはがき
鷺谷七菜子

これはなんと明るく希望に満ちた詩（俳句）であろうか。はがきが良い知らせであるに違いないと思わせるのは、添景としての赤い郵便車とともに照り映える斑雪（残雪）であることはいうまでもなく、あらためて「雪」が持つイメージの豊かさに驚かされるのである。

註（引用・参考文献）

- 黒川威人 『日本における雪の美学－日本デザイン美学の本質を求めて』金城紀要第37号 2013、『日本の環境デザイン美学に見る風土の影響－日本のデザイン美学序説－1』日本デザイン学会第60回研究発表大会概要集 2013、『古代詩歌に見る日本美の特性－日本のデザイン美学序説－2』日本デザイン学会第61回研究発表大会概要集 2014
- 「雪月花」フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 同上事典の記述から抜粋。
- 漢詩は読み下し文のみとした。読み下し文、訳文とも『新潮日本古典集成（第61回）倭漢朗詠集 昭和58年』の注釈による。なお和歌も意味が難しいものは文頭に〔訳〕を付け同上書の訳文を載せた。
- 川端康成 『美しい日本の私』講談社現代新書 1969
- 『禅とは』 禅 今この時をいきる 人間禅 Copyright (C)2012 NINGENZEN
- 家持は越中守在任中の5年間に223首の歌を詠んでいる。これはそれ以前の14年間に158首、以後の8年間に比べると著しく多い数である。
- 新谷秀夫 「今高岡は万葉に燃えている」の背景 『高岡芸術文化都市構想 都萬麻 01』富山大学 芸術文化学部 編 2012
- 西山松之助 「日本における 花の文化史」『花 美への行動と日本文化』NHKブックス 328 1978
- コトバンク 「季節風気候」『世界大百科事典 第2版』の解説
- コトバンク 「季節風気候」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』の解説
- 温暖湿潤気候－Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/温暖湿潤気候>
- 中谷宇吉郎 『雪』 岩波文庫 緑 142-2 1994第1刷 2011第16刷版
- 「大陸性気候」フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 「本歌取り」歌学用語。典拠のしっかりした古歌（本歌）の一部をとって新たな歌を詠み、本歌を連想させて歌にふくらみをもたせる技法（以下略）。コトバンク プリタニカ国際大百科事典小項目事典の解説
- 鈴木牧之 『北越雪譜』 岩波文庫 黄76 昭和11年第1刷 昭和46年 第18刷版
- 和田京子 『古⇔今 比べて分かるニッポン美術入門』平凡社 2010
- 熊倉功夫 「数奇・日本の心とかたち」『千家十職と好みもの』淡交別冊 No.21 1977
- ブルーノ・ムナーリ「柳にとってのデザイン－ミラノ近代美術館での柳宗理のデザイン展について」『ドムス』1980年2月号（ ）内は筆者による。
- タイモン・スクリーチ 田中優子、高山宏 訳 『大江戸視覚革命：十八世紀日本の西洋科学と民衆文化』 作品社 1998
- ドナルド・キーン 足立康 訳 『果てしなく美しい日本（原題：LIVING JAPAN）』講談社学術文庫 1562
- 稲次敏郎 『庭園と住居の〈ありやう〉と〈見せ方・見え方〉－日本・中国・韓国－』山海堂 1990

（くろかわ・たけと 本学名誉教授／環境デザイン）
（2016年10月31日 受理）